

「地上の異界、スラウェシ島(1)」(2021年07月12日)

8年の歳月をかけてマレー半島からヌサントラの島々を巡ったウォレスが大きい関心を抱いたことがらのひとつがスラウェシ島の自然史だった。スラウェシ島には、その周囲の島々を含めて世界の他の場所にいない動物が棲息しているのである。そこはまるでおとぎ話の世界のようだ。

スラウェシ島の周囲を、さまざまな方角から来た深海が取り巻いている。スラウェシ島とカリマンタン島を隔てているマカッサル海峡は深さが1千から2千メートルに達する。東側のマルクの島々とも深い海で隔てられている。バンダ諸島とスラウェシ島の間には6千5百メートルの海溝が横たわっている。スラウェシ島のそんな様相は、スマトラ・ジャワ・バリ・カリマンタンなどの島々を載せているスンダ大陸棚と対照的な姿をわれわれに示しているのである。スンダ大陸棚にある島々の間はせいぜい深度50から150メートルの海で隔てられているにすぎないのだから。同様に、オーストラリア大陸とパプアニューギニア島の間も浅い海で隔てられているだけだ。

スラウェシ島は周辺の島々から断絶し隔離されたエリアになっていた。同じ地球上にありながら、他の土地にある大自然の生態と切り離されていたスラウェシ島で気の遠くなりそうな長い歳月の間に何が起こっていたのか、それが解き明かされるときにこのおとぎ話の世界の実態が明らかになることだろう。



突き出した口の下あごから上に向かって伸びた鋭い一対の牙の他に、鼻からも上に伸びて一回転するように額に迫るもう一対の牙が生えているバビルサ babirusa がヨーロッパに紹介されたのは多分、ヴィレム・ピソ Willem Piso (ラテン語名 Gulielmi Pisonis) が1658年にアムステルダムで著わした *De Indiae utriusque re naturali et medica* と題するラ

テン語の書物の表紙に描かれた図が最初だったようだ。その絵の動物は長い間ヨーロッパで、架空の生き物と考えられていた。

この動物は頭部がイノシシのような形をしているが脚は鹿に似ていて、それが現地語でバビルサと呼ばれる原因になったのだろう。ウォレスは1858年にスラウェシでこの動物をじっくり観察した結果、これに類似する動物は世界のどこにも見られないという結論を下している。

スラウェシ原生のこの動物は、体長85～105センチ、体高65～80センチ、体重90～100キロで、尾は20センチに達する。イノシシは土を掘り起こして食べ物を得るのに反し、バビルサは果実を食べたり、倒木を割って虫の幼虫を食べる。

雌の出産は年一回で、一回に1～2頭しか子を産まない。妊娠期間は125～150日、赤児は母親がひと月間授乳する。授乳期が終わると子供は森の中で、自力で餌を探す。だいたい24年くらいがこの動物の寿命だ。

バビルサはスラウェシ島北部中部東南部に散在しており、絶滅に向かっている種として1986年に保護動物に指定された。推定残存数はよく分かっていない。頭数が減っている原因の一つに人間が食用にすることが挙げられている。



やはりスラウェシでしか見られない動物のひとつにアノア anoa がある。野生の牛なのか、水牛なのか、それとも羚羊に属するのかがいまだに定まらないままだ。アノアは山アノアと平地アノアに区分されていて、角や身体の大きさに違いがある。平地アノアは体格が小さめで尾も短く柔らかい。角は湾曲している。山アノアは身体が大きめで尾が長く、白脚で角はまっすぐだ。

だがハビタットで分ける方法には反対者が多く、山で見つけたもののなかに平地アノアの特徴を持つものもあり、また逆も真であるため、区分の基準を変えるべきだという意見が絶えない。アノアも絶滅危惧種に指定されている。推定頭数は3千頭で、減少の一途をたどっている。やはり原因のひとつに人間による狩りが含まれていて、人間は皮・角・肉を欲しがるのである。北スラウェシやゴロンタロのパサルでは、時おりアノアの肉が売られている。[続く]

「地上の異界、スラウェシ島(2)」(2021年07月13日)



スラウェシ原生の珍しい生き物のひとつにタルシウス *tarsius* がいる。手足の指は5本あり、体長は十数センチしかないが尾は20センチもある。体重は100グラム前後で、まるで手のひらに載せて愛でてやりたいような生き物だ。目が大きくて真ん丸だから、実に印象的な顔つきをしている。首は短いが180度回転する。夜行性で虫を食べる。

現地人がタンカシ *tangkasi* と呼んでいるこの動物はたいてい枯れた立ち木の洞に巣を作り、夫婦と子供で住んでいる。日没後と夜明け前に動きが活発になるそうだ。食事時には、まず雄が外に出て周囲の危険を探り、敵がないことを確認してから家族に鳴き声で合図する。すると雌が洞から出てきて、子供たちを外に誘い、食べ物を探すのである。

動きはたいへん素早く、おまけにその小さな身体からは想像もできないような3メートルもの高さまで跳ぶことができる。もっと特異な技能はかれらだけが行える通信方法で、超音波を使って会話する能力をこの小さい生き物は持っているのだ。最高で周波数91khzの音波を発信し、仲間はその「声」を聴くことができるのである。人間の耳が捉えることのできる周波数は20 khz程度でしかなく、その辺りの事情を知らないひとにとってタルシウスが超音波で叫び声を上げている姿は、口を開いて頭を振りながら何らかのエネルギーを放出している様子にしか見えず、ミステリーを感じさせるものになる。

メガネザル目に入るとされているこのタルシウスは仲間がフィリピンやカリマンタンにいただけで、大陸部にはいない。数万年前に世界中に分布していたメガネザル目はかれらを残して滅びたようだ。最後の氷期が終わったあとそれらの島に取り残されたかれらは、世界中にいた他の仲間がその後滅びたあとも生き延びることができたと推測されている。スラウェシのタルシウスは、身体的形態は昔のままだが、昆虫食に適合するように体が小さくなったとの見解が一般的だ。

スラウェシ島はヌサンタラのほぼ中央部に位置している。広大なヌサンタラ島嶼部のほぼ中央にだけ、どうしてそのような珍しい動物が集まったのか？その答えはスラウェシ島の生成方法に関係しているとウォレスは看破した。長い地球の歴史の中で、地殻が移動し、海面が上下した。最近の研究によれば、スラウェシ島が最初からそのKという文字の形で出現して来たのではないという論が建てられている。

更新世の時代、氷期に襲われた地球の海面が低下して、スマトラ・カリマンタン・ジャワ・バリはアジア大陸と陸続きになった。そのころ、生き物は陸地の上を自由に移動することができた。スマトラとカリマンタンの河に住む淡水魚の中に同一のものが見つかっていることから、陸地がつながっていた時代、その間に大河が流れていたことを証明するものであるという仮説も立てられている。オーストラリア大陸とパプア島でも似たようなことが起こっていたにちがいない。

だがその時代でも、スラウェシ島はどちらの大陸にもつながらなかった。いや、それどころか、スラウェシ島が現在のK文字の形に作られて行く間、大陸とつながったことは一度もなかったという説が有力なのである。オーストラリア・ユーラシア・パシフィック(フィリピン)の三つのテクトニックプレートの破片が寄せ集まって形成されたのがスラウェシ島であるという理論がそれだ。

それによれば、西側部分はユーラシアプレートの先端にあるカリマンタンとつながっており、北はフィリピンプレート、東南部分はオーストラリアプレートにそれぞれつながっていたもので、東半島部はオーストラリアプレートとユーラシアプレートの衝突によって海底が隆起したものであると言う。

西側部分については、バンティマラ Bantimala とバルス Barus にジュラ紀の石灰岩層があり、それが南カリマンタンのムラトウス Meratus のものと全く同一であることが検証されている。東南部分については、ブトン Buton = バンガイスラ Banggai Sula がスラ = ソロン断層の分岐によって現在の位置に移動したものであり、北部分は火山帯がフィリピンにつながって環太平洋火山帯の一部をなしている姿が明白なつながりを示している。スラウェシ島の火山はすべて、この北部分に集中しているのだ。[続く]

「地上の異界、スラウェシ島(3)」(2021年07月14日)



ロバート・ホールが2009年に発表した Southeast Asia's Changing Palaeogeography と題する論文はスラウェシ島の形成プロセスに触れている。6千万年前の始新世のころ、カリマンタン・ジャワ・スマトラはほぼ現在の位置にあったが、スラウェシ島はまだ存在せず、その部分部分があちこちに散らばっていた。現在のスラウェシ島西側部分は8千万年前の白亜紀末にユーラシアプレートから分離してプレートの端に位置していた。オーストラ

リア大陸の南極からの分離もそのころに始まった。

4千5百万年前ごろからオーストラリア大陸がいくつかのプレートを押しながら北に向かって移動し始めた。そのひとつが後にスラウェシ島東南半島部になっていく。2千5百万年前の中新世でもオーストラリアプレートは年間10センチの速度で北への移動を続け、スラウェシ島西側部分に火山が出現し、火山の列は北に向かって発達した。

今から1千9百～1千3百万年前の時代、バンガイ=スラプレートの破片が海底から東半島部を引き上げながら西側部分につながった。その衝突がスラウェシ島北側でプレートの沈み込みを引き起こし、現在のスラウェシ中部地域の地殻を上昇させて地層褶曲を招いた。スラウェシ島西側部分にできた火山はなくなって、北半島部からフィリピンにかけての火山帯に移って行った。一方、スマトラ～ジャワ～バリにあった火山帯もヌサトゥンガラ方面に向かって伸びて行った。

スラウェシ島の歴史の中に納められたすさまじい地殻の動きは、島内のあちらこちらにその名残を見せている。東南半島部の付け根にある海拔1千数百メートルの高地、南スラウェシ州東ルウ県ソロワコ Sorowako に見られるウルトラマフィックの露出層がそのひとつだ。マタノ湖南西岸の丘陵地帯を黒緑色の岩石層が埋め尽くしている。

ウルトラマフィックは広大な地域に渡ってオフィオライトの層を作り出し、スラウェシ島を世界

のニッケル大産地のひとつにした。東スラウェシオフィオライトはポソからソロワコを經由して東南半島部に広がっている。

プレートの衝突で海底が持ち上げられ、海上に露出したことで海底の土壌に変化が起こり、ニッケル・コバルト・マンガン・鉄鉱石・クロマイトなどたくさんの鉱物が生み出された。深海でできるウルトラマフィックと浅海で作られる石灰岩が混じり合っただ東スラウェシオフィオライトを形成していることが、いかにすさまじいプレートの衝突が起こったかを明白に物語っている、と専門家は述べている。

マロス Maros～パンケップ Pangkep～トラジャ Toraja に伸びているカルスト地形も激しい地殻運動の歴史を物語っている。その一帯に見られる石灰岩はかつてそこがスダ大陸棚につながっていたことを示している。その石灰岩地層は5千6百万年から1千8百万年前の始新世から中新世初期に形成されたものであり、その時期にオーストラリアプレートが動いて南東の方角からスダ大陸棚へのプレート衝突が始まった。その動きがマカッサル海峡に陥没を引き起こしたし、石灰岩層に亀裂が起こって断層が諸方向に走った。マロスやパンケップに見られる、岩柱や洞窟に満ちたカルスト地形はこうして形成された。



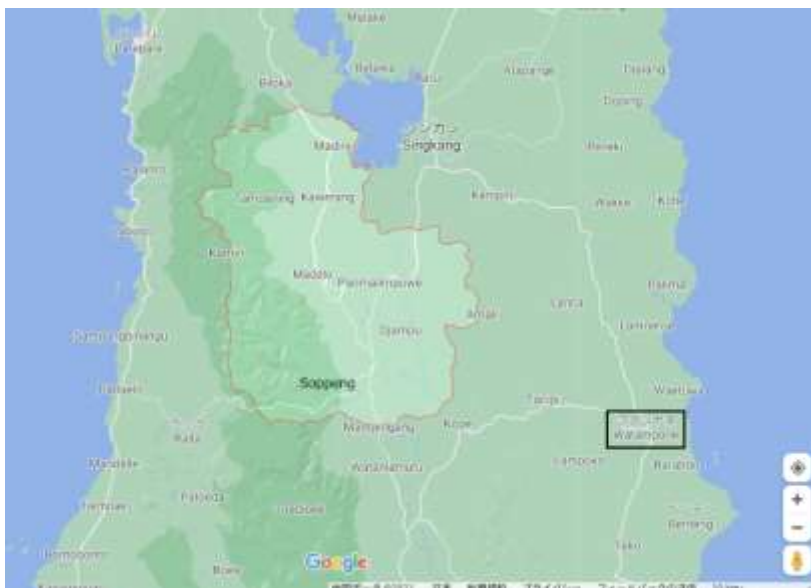
マロス～パンケップカルスト地帯の調査によって、タンジュンビラ Tanjung Birah とレアンレアン Leang Leang に古代ビーチの跡が発見されている。およそ3万年前に東南アジア海域では、現在の海面から65メートルも高い位置が海面になっていた。

またカルストの洞窟が古代人の棲息場所になっていたことを示す遺跡や遺物も発見されている。貝塚があり、見つかった貝は9千から3万年前の時期のものであることが調査済みだ。また石器に加えて、岩に手形をステンシルして色を塗ったものやバビルサの線画などが洞窟の中で発見されている。このカルストで発見されたのは中石器時代から新石器時代にかけての遺跡や遺物である。

中石器時代にそれらの洞窟は古代人が立ち寄る場所だったが、新石器時代にはそこで長期間の生活が営まれるようになった。マロス県の古代洞窟遺跡は16カ所、パンケップ県は17カ所が保存されている。[続く]

「地上の異界、スラウェシ島(4)」(2021年07月15日)

このマロス～パンケップカルスト地帯に284種の木本類植物が見られ、その中に原生種のものも混じっている。ウォレスはここを訪れたとき、数百匹の蝶がカラフルな雲を空に作るあり様を目にして、感動している。バンティムルン Bantimurung は蝶の王国であり、ウォレスは3百種を超える蝶をそこで採集した。マカッサルの街から40キロ北のその地区は現在、バンティムルン＝ブルサラウン Bulusaraung 国立公園になっている。



南スラウェシ州ソッペンとボネの間にワラナエ Wallanae と名付けられた古代河川があり、ワラナエ渓谷で発見された古代象ステゴゴンの化石は、牙を4本持っていた。イノシシの仲間である Celebochoerus heekerveni も牙が4本あった。

スラウェシで発見されたそれら脊椎動物の化石は、ジャワなどで見つかったものと異なり、スラウェシ島が周辺の世界から隔離されていたために、その地の環境に適応する形で動物たちが進化したことを示している。哺乳類は小型化し、爬虫類は大型化した。隔離された環境は遺伝子変化に影響を及ぼして、新しい種を作り出した。

スラウエシの動物が周辺の島々に住む動物と異なっているのはそのせいである。また遺伝子のつながりが絶たれてしまうことも起こったために、祖先が何であったのかを調べることができなくなっている。バビルサやアノア、あるいは原生種のサルなどの祖先を調べようとしても、古代生物との遺伝子相続が途切れているために祖先を追跡できない状態になっているのだ。

スラウエシに現生している特異な動物たちは、その習性も変わっている。そして、その変わった習性がスラウエシの自然の持っている特徴を巧みに取り込んでいることに、われわれは驚かされるのである。たとえばマレオ maleo。ツカツクリ科のこの鳥が地熱のある土地に穴を掘って産卵するのは、自分が卵を抱いて孵化させる習性を持っていないからだ。おまけに、卵の穴を偽装するための空穴まで周囲に用意する。

その地熱が温水だまりを形成する。水は塩分や種々のミネラルを含んでいて、バビルサの生活はその水なしには成り立たない。バビルサは胃の酸性度が高くなりすぎないようにするために、アドウドウ adudu と呼ばれる温水だまりの水を飲まなければならない。同時にその水はバビルサが主食にしている実の毒性を中和させることにも役立っている。アドウドウの水は普通の水よりもナトリウム含有量が36倍も大きいのである。

スラウエシの特異な動物たちは、人間という雑食性の生き物に種の存亡を脅かされている。言うまでもなく、それはその動物たちが特異だからというのが原因でなくて、反対にそこに住んでいる人間が野生動物の捕食をいまだに続けているためだ。現代文明という見地から見ると、そこに住んでいる人間の方が文明発展の段階尺度において特異なのだということになるだろう。

最初は他の野生動物を狩って食糧にするのが二本足で直立歩行するサルの、この地球上での普通の姿だった。サルたちが人間に進化して行く過程で食糧を得るための動物飼育が起り、狩猟行動は減ったようだ。もっと時代が下がると、文明化の名のもとに野生動物の狩りはゲームとされ、狩った動物の肉を食うことはグルメ趣味の一部になった。つまり自己の生存を維持するための食材だったのは遠い野蛮な時代であり、人類文明史の中でそれは否定されるものに位置付けられたというのがこの文明史観だろう。その裏側には文明の高低という意識がへばりついているように見える。

英語に bushmeat という言葉がある。食用に狩られた野生動物の肉という意味で使われ、アフリカやオーストラリアでの生活に日常的に出現するものになっていた。ウォレスもヌサンタラの旅行中にしばしばブッシュミートを生きるために食べている。[続く]

「地上の異界、スラウエシ島(終)」(2021年07月19日)

市場で肉を売っている販売者は販売台の権利を持つひとりで、仕入れた肉を売っているにすぎない。かれらはただ、売れる物を売れる価格で売っているだけなのだ。保護動物をかれらに卸しているのは狩人たちなのである。狩人はたいてい、卸先を固定している。つまりパサルで販売台を持っている者の中の同じ人間といつも取引しているということだ。

だから販売台を持っている者は狩人が卸す動物が何であれ、それを相場の価格で売るだけなのである。狩人はだいたい北スラウエシやゴロンタロを狩場に行っているが、物によってはもっと遠くへ行くこともあるし、あるいは遠くから送らせることもする。たとえばコウモリは南スラウエシから取り寄せる。

しかし狩人がパサルの販売台に卸さないものもある。それはバビルサの頭だ。牙を欲しがるマーケットが別にあり、狩人はバビルサの頭を買取人に売る。買取人は肉などよりもはるかに高い金額でバビルサの頭を買い取るのである。

動物保護活動家のひとは、ここの市場だけが保護動物の肉を売っているのではなく、ミナハサのほとんどすべての市場で同じように売られているのだと語る。しかもそれを買うのは一般家庭だけでなく、レストランも買っている。トランススラウエシ街道沿いの多くのレストランは保護動物の肉料理を客に出しており、客はもちろん隠語を使って注文する。ストレートに「アノアの背肉ステーキ4百グラムをメディアムで。」などと注文しても、知らん顔をされるのがオチだ。

野生動物の肉を何でも食べるのは昔から続けられてきた習慣だ、とミナハサ住民のひとは言う。農夫だったかれの父親は、子供にイノシシ・ヤキ・バビルサ・アノア・ヤマネコ・クスクスなどを狩って食べさせた。それらの肉は洗礼・結婚・誕生日などの祝宴やパーティでも頻りに客に供せられたから、だれもがそれを普通の食べ物として食べながら成長した。パーティや祝

宴で珍しい動物の肉が出たら、みんな奪い合うようにして食べたものだ。サルや犬の肉料理すら出ない祝宴やパーティは、貧相なお膳立てだと言ってみんなが批評した。かれ自身、57歳の今日までに21種類の野生動物の肉を賞味したそうだ。「まだ食べたことがないのはタルシウスくらいだ。あれは肉などろくにないから。わたしゃ、4人の子供も自分と同じように育てた。もうすぐ5歳になる孫なんか、アンジンリチャリチャが大好きだよ。」

グルメに造詣の深い地元民は、ミナハサ人が何でも食べるのは、味付けが辛いことが鍵になっている、と分析している。何の肉であろうが、トウガラシをたっぷり使って辣くしてあれば、みんな喜んで食べるのだそうだ。どんな生き物でも食べるというこの郷土特性を地元民はこのように韜晦している。いわく「脚があるものなら何だって食べる。机の脚以外はね。空を飛ぶものなら何だって食べる。飛行機以外はね。泳ぐものだって何でも食べる。舟以外はね。」

ミナハサ人のこの食習性は中国人に教わったものだとかれは主張する。「17世紀ごろ、華人がミナハサに入って来て、中国の食習慣が地元民に伝えられた。たとえば犬だ。もともと犬は番犬としてミナハサで使われていた。ところが繁殖力旺盛で、どんどん数が増加して行き、人間の生活に邪魔になるようになった。『じゃあ、食べばいい』というのが華人のロジックで、犬の料理方法を華人がミナハサ人に教えた。1958年にプルメスタ運動が北スラウェシに入って来たとき、住民はみんな町から逃げ出して森の中に隠れ住んだ。生き延びるために森の中で手に入る食べ物を何でも食べた。その時期に、野生動物を食べる習性が強まった。大人はだいたい狩りをすることに慣れていたので、野生動物の肉を子供に食べさせた。親が食卓に用意した食べ物は子供に食べる義務がある。」

だが、北スラウェシの野生動物たちが絶滅に向かっている原因は人間に食われることばかりではない。ビトゥン港からフィリピンに向けて密輸出される保護動物も少なくない。森林不法伐採も原因のひとつであり、合法的な農園開発による森林消滅もまた別のひとつだ。

それらのすべては人間が行っていることなのである。スラウェシ島が異界であることを許そうとしない人間たちに、この異界は将来どのような反撃を加えるのだろうか？[完]